

第8回夕張市高等学校対策委員会会議録

- 日 時 平成27年8月4日(火) 午後6時～午後7時40分
- 場 所 夕張中学校 2階 多目的室
- 出席者 本田・波佐尾・鈴木・今・長田・白井・伊藤・外尾・澤井・黒瀧・小林委員
北海道教育庁新しい高校づくり推進室 松本参事・藤井主幹
北海道教育庁空知教育局企画総務課 高橋課長
事務局 古村・押野見・堀

1 開 会

2 委員長挨拶 小林委員長

3 報告事項

- (1) 平成27年度公立高等学校配置計画地域別検討協議会(第2回)について【資料2・3】
…………… 委員長より説明
- (2) 夕張高校の魅力化検討WGの設置について【資料5】 …………… 事務局より説明

4 説明事項

- (1) 公立高等学校配置計画について【資料6】
…………… 北海道教育庁新しい高校づくり推進室 松本参事説明
- (2) 夕張高校の魅力化検討WGについて【資料7】
…………… 北海道教育庁新しい高校づくり推進室 藤井主幹説明

5 意見交換

委員長

引き続き意見交換に入りたいと思います。
ご質問等ありましたらお願いいたします。

委員

キャンパス校について色々と説明いただきありがとうございます。
だいぶ細かなところまで見えてきましたが、出張授業について何点か確認と質問があるのですが、まず1点目は、3つの高校の例を出されていた訳ですが、連携するのは基本的に1校なのか、たとえばA高校の例が出ていますが、音楽はB高校から、家庭基礎についてはC高校から、そういう連携の仕方があるのかというのが一点、もう一点が1週間に8時間程度実施ということで、それぞれの学校

に8時間入っておりますが、学校全体で8時間という押さえで良いのか、もう一点が、A高校のビジネス実務2時間となっておりますが、たとえば月曜日にビジネス実務1時間で、金曜日にもう1時間という場合については、1時間ごとに来られた先生がその1時間で帰ってしまうのか、そのあたりをお伺いしたい。

藤井主幹

まず1点目の連携の在り方についてですが、センター校が決まった地域キャンパス校をサポートしますので、1対1対応ということになります。

センター校から地域キャンパス校に週8時間程度、資料のAの例ですと、4科目を出張授業で2時間ずつサポートしています。

夕張高校が仮に地域キャンパス校になった場合、夕張高校のセンター校が決まりますので、そこから出張授業等で授業を支援してもらうことになります。

それに関わって、道教委では、道立高校間連携を実施しております。

これは、近隣の道立高校が相互に教員を派遣して教育課程の充実を図るもので、仮に、夕張高校が「科目を開設したいが、専門の先生がない」場合、相手先の高校と合意できれば、その学校から教員を派遣してもらって授業を行うことができるシステムです。

ですから、仮に地域キャンパス校になった場合、センター校からの支援はもとより、道立高校間連携を活用することによって、センター校以外の学校からも授業支援を受けることが可能です。

2点目の、出張授業の時数についてですが、原則、週8時間程度としておりますが、移動等の課題もあり、最も少ない学校で週7時間、最も多い学校で週12時間の実施となっております。各学校の状況に応じて、柔軟に対応しています。

先ほど申し上げたように、出張授業が8時間より少ないのであれば、その分遠隔授業を実施してフォローするなど、可能な限り授業支援が8時間となるよう取り組んでおります。

また、両校の距離が40km離れていますと、移動だけで1時間30分程度かかってしまい、往復すると、移動だけで3時間にもなります。

50分間の授業を行うために、移動が3時間というのは必ずしも効率的ではないことから、ケースバイケースですが、多くの学校では、2時間連続の授業計画を組み、センター校の先生が放課後まで待機し、生徒の質問に答えたり、補充的な指導を行ったりするなどしています。

授業の連続についても、生徒の学習効果を考えますと、3時間の連続は厳しいものと考えております。

委員

もう一点、資料の「授業に関する連携」で、写真を見ますと、キャンパス校の生徒の机が会議室の机のようですが、常設されたところで授業を受けているのでしょうか。

藤井主幹	<p>この遠隔システムにはキャスターがついており、移動させることも想定しておりますが、実際に移動させるとなると配線等の関係がありますので、多くの学校では、空き教室を専用教室として活用しています。</p> <p>現在、体育などの実技の多い教科で、どの程度遠隔授業で対応できるかといったことについても、研究開発を進めているところです。そうなると体育館まで機器を移動させなければならないことも考えなければなりません、移動の負担も大きいものですので難しい面も出てくるものと考えています。</p>
委員長	<p>よろしいでしょうか。その他ございませんでしょうか。</p>
委員	<p>出張授業の選択なのですが、どのように決めて、若しくは保護者ですとか生徒の意見がどれだけ反映するのか、例えば大学受験のために受験科目だけを集中的にやりたい場合などはどうなのでしょう。</p>
藤井主幹	<p>支援する教科・科目や連携の方法等については、両校の校長先生、教頭先生、先生方で構成する連携委員会で検討の上、決定します。地域キャンパス校として支援してほしい教科・科目もありますし、センター校としては、学校体制としてできることとできないことがありますので、そこを両校で十分相談して決定しています。たとえば、今年度は難しくても、次年度からの実施に向けて検討するということもありますので、そこは両校の状況をしっかり共有してもらいながら進めていくということです。</p> <p>基本的に地域キャンパス校は校長が配置されており、地域キャンパス校として独自の教育課程を編成しておりますので、各学校では育成する生徒像に基づき、生徒にどういった科目を選択させるかを考えます。そのため、多くの学校では、例えば生徒に「どんな科目を勉強したいか」を確認したり、「将来の進路はどう考えているのか」を面談をとおして確認したりするなどして、生徒の希望が可能な限り叶えられるよう教育課程を編成しています。</p> <p>本来は地域キャンパス校が望んでいることをすべて叶えられるのが最良ですが、センター校の事情等も考慮し決定していくことになります。</p>
委員	<p>わかりました。</p>
委員	<p>先ほどの説明で、だいぶ地域キャンパス校のことが分かったと思うのですが、メリットについての説明は豊富にあったのでよく分かったのですが、最後のページに課題と解決に向けた取組が少し出ている程度で、また、ここに載っている内容というのはどちらかというと、実際に運営をしてみても浮き彫りになった問題に対しての課題と見受けられますが、今まで普通高校だった生徒さんたちが、キャンパス校化によって、いきなり自分の学校がキャンパス校になった方もいら</p>

っしやると思いますが、生徒さんたちや保護者の方の声について、実際アンケートを取ったということはあるですか。

藤井主幹

直接保護者の方々や生徒にアンケート調査を実施したことはありません。

例年、地域キャンパス校とセンター校の管理職や先生に集ってもらい、研究協議会を開催しており、そこで実際の連携や生徒の状況等について協議するとともに、各学校の意見や要望を把握しています。

昨年度の会議においては、制度自体に対する意見はありませんでしたが、実際に連携していく上で課題となっていること、例えば、遠隔システム使いたいののだがどのようにすればよいのか、学校全体で機器操作の研修が進まない、などのお話がありました。現在、各学校では制度の趣旨を踏まえ、課題を前向きに捉え、その改善に向けて頑張ってくれています。

委員

直近でキャンパス校化したのはどこの高校ですか。

藤井主幹

今年度から佐呂間高校が地域キャンパス校となり、北見柏陽高校がセンター校になっています。

委員

わかりました。ありがとうございます。

委員

先ほどセンター校が決まると言っていましたが、センター校というのはどのように決まるのでしょうか。

キャンパス校でやりたい科目があるので、その科目がある学校ということになるのか、ここで言ったら岩見沢というお話でしたが。

藤井主幹

夕張高校では、10の必修修教科があります。他の普通科の高校も同様に10教科を履修しなければなりませんので、そうした観点から考えると教員配置もほぼ同様の配置がなされます。センター校からの出張授業が可能かどうかなど、総合的に勘案して決めていますので、地域キャンパス校で実施したい教科の教員がセンター校にいないといったことはないとお考えいただいて結構です。

委員

それは北海道が決めるのですか。

藤井主幹

道教委として決定していきます。

松本参事

道教委が決定することになりますので、配置計画の中でセンター校はどの学校ということを表示します。また、検討の過程では対象校の校長先生のご意見を聞くなどして、ということになります。

委員	ある程度意見は吸い上げていただけるということでしょうか。
松本参事	たとえば、岩見沢市内の場合は、センター校の候補としては、普通科の高校は2校しかなく、一つは東高校であり、もう一つは西高校であります。西高校は4学級規模ですが、単位制を導入しておりまして、教員数が一定程度加配の部分がありますので、どちらが出張しやいかということも含め色々と勘案した上で決定するということになります。
委員長	よろしいでしょうか。
委員	センター校化する学校は教員がある程度余裕のある学校になると思いますが、出張授業で出て行くことによって、本来の体制が薄くなると思うのですが、その点について手立てというのは何かあるのですか。
藤井主幹	<p>教員定数は、先ほど松本から説明させていただいたように、国のいわゆる標準校により決まっております。1学級の高校ですと、校長が1人、教諭が8人、養護教諭が1人、事務職員は除きますが、このような配置になります。つまり1学級の高校は、標準法では教頭は配置されません。</p> <p>道教委では、こうした状況を踏まえ、学校経営の充実等の観点から、道単独で教頭を1人、教諭を1人、それから事務職員を1人、合計3人の加配を行っています。ですから、現在、夕張高校には校長1人、教頭1人、教諭9人、養護教諭1人、事務職員2人、公務補・事務生が2人配置になっています。</p> <p>センター校からは出張授業で複数教科教員が出ますので、負担がかかることから、地域キャンパス校に加配した教諭1人をセンター校に移動し、センター校の体制充実を図っています。</p> <p>よく、「そのまま地域キャンパス校に配置しておけばよいのではないか」と質問されますが、そのままの配置ですと、配置している教員の免許状の教科しか授業を実施できませんが、センター校に移動することにより、センター校の総合的な教育力を活用して、例えば英語と数学、家庭といった複数教科・科目の支援が可能となるわけです。</p>
委員	わかりました。
委員	部活動でも連携ができる、部員が足りない時に合同でチームを造るというお話しがありましたが、いきなり大会に行って、じゃあ一緒に野球をやりたいということにはならないので、何度か合同で練習をしてということになると思いますが、その場合の移動のコストがかかってしまうと思うのですが、これについて

はどこで負担していくことに現状ではなりますか。

藤井主幹 仮に合同で大会に出る場合、当然それに向けた練習も必要ですので、移動の費用負担等については、連携委員会で協議していただいて、両校の予算の中から負担していただいております。

委員 わかりました。

委員 基本的なことをお伺いいたしますが、キャンパス校を選択しなければ廃校になるのですか。

松本参事 基本的には、原則一定の学校規模が必要と私どもは考えておりますので、2学級以下については原則再編整備ということで、配布資料の指針の概要版の中に記載があるのですが、2学級以下は原則再編なのですけれども、一律に再編するのではなくて、地元進学率が高い場合で、かつその高校がなくなると他の高校への通学が非常に難しい状況の地域がある場合は、地域キャンパス校として残しましょう、これらに該当しない場合には再編で進めていく、その2つの選択になります。先ほど言いましたように、空知管内で、たとえば沼田高校は20年度に募集停止いたしました。あそこは深川がすぐそこにあつて、深川に行きやすい状況であった、また、生徒数も、沼田の生徒はほとんど深川に行ってしまう、深川の生徒が沼田に来るといった状況もありましたので、地元進学率が低い、他の高校に通う場合の通学困難な状況がないということで募集を停止しました。

三笠高校につきましても、岩見沢市に通えて、逆に岩見沢市の生徒が三笠高校に来ていたという状況でありましたので、夕張とは違うと思います。

選択肢は2つで、今回夕張が1学級になりましたので、再編整備の原則に則りながらも、存続を図る形で地域キャンパス校化して、先ほど藤井が説明したように教育環境を少しでも維持、向上させていくこととしたいということであり、基本的には存続の地域キャンパス校か、単なる再編整備に入っていくかという分かれ目のところだと考えております。

委員 2間口になったらまた普通の高校に戻るのでしょうか。

松本参事 地域キャンパス校は、2学級でも導入できないことはないのですけれども、原則1学級から順次導入しております。

ただ、夕張の場合は、生徒数の推移を先ほど説明しましたが、2学級に戻るといことはなかなか社会状況の大きな変化がない限り、非常に厳しいのではないかと考えており、市内の中学校卒業生が全員夕張高校に来て40人に届かない年が出てきますし、また、これまでやはり市外に出る生徒もいましたので、

今後、状況の変化で生徒が多数移住してきて、常時 40 人を超えるという見通しがあれば計画変更をして、2 学級に戻すことはあります。

委員長 よろしいですか。他よろしいでしょうか。

松本参事 せっかくの機会ですので、細かいことでもよろしいですし、聞いていただければ。

委員 今のお話で、夕張高校をキャンパス校化しましょうという判断をしなければいけないリミットというのは、いつなのでしょう。

松本参事 私どもとしては、今まで夕張高校は入学者選抜の結果、2 学級から 1 学級になりましたが、その後 2 学級に戻すことも行ってきております。

ただ、今回 1 学級がほぼそのまま推移してしまうという状況となったので、先ほども申し上げたように、1 学級になるとかなり教員数も減ってきますから、そうすると早く地域キャンパス校化して、出張授業で応援しながら教育環境を維持していきたいということなので、基本的にはできる限り早くということがあります。

今回の配置計画の中で、28、29、30 年を示していきまして、夕張高校は特に計画上は何も表示しておりませんが、道教委と地元で、地域キャンパス校でやっていきたいと思いますという意見が整った場合には、あとはセンター校も選ばなければなりませんので、それを選ぶ時間も必要ですし、どういう連携をしていくかということも考えなければなりませんので、そういう時間を考えますと、例えば来年からすぐ地域キャンパス校にするというにしても物理的には難しいと思います。

委員 わかりました。

委員長 よろしいですか。

この対策員会を通しながらこの後、前回お話ししたようにスケジュールに沿って議論を活性化させていきたいと思っております。

その先にどのようなことが待っているか、今段階では言えませんが、充分議論を尽くしていくことになっていくと考えております。

その他なければ、私の方から 1 点、センター校からどの科目を入れてどうするのか、というのは双方で話し合いながらということですが、3 年なり 4 年なり、長いスパンで考えるとすれば、人事上の問題も色々あるように思うのですが、その辺はどうなのでしょう。

藤井主幹 基本的には生徒が入学すると、その生徒が卒業するまでの教育活動の計画を立てます。それに基づいて連携委員会で相談していただくこととなります。

たとえば、地域キャンパス校から英語と数学を重点的に勉強させたいと考えており、習熟度別指導やティームティーチングをやりたいので、英語4時間、数学4時間の支援をお願いしたいといった要望があった場合、センター校では、センター校としての教育活動が適切に行われるかといったことを踏まえ、どのように支援できるかといったことを様々な角度から検討します。連携委員会で、ある程度先の見通しを持ちながら十分協議をしておかないと、支援する教科は決まったものの、支援できる教員がないということになりますから、それは教職員の人事の時期を見ながら、両校でその時期までに決定できるよう対応しています。

今まで、人事に関して混乱を招くようなことはありませんでした、その点は大丈夫かと思えます。

委員長 ありがとうございます。その他よろしいですね。
それではその他に進ませていただきます。
事務局お願いいたします。

6 その他

事務局 それでは、次回の対策委員会ですが、今月下旬から来月上旬の間で、近隣の地域キャンパス校の見学を考えております。

道教委さんの協力を得ながら、相手の学校の都合もありますので、打合せをしながらいつが良いのかを決めて、決まりましたらまた皆さんにご案内を差し上げたいと思います。

どうしても平日ということになりますけれども、できる限り皆さんに参加していただければと考えております

その他は以上です。

委員長 それでは、今回はキャンパス校を具体的に実際に見て、それぞれの学校でのご苦労も含めて、また今日の話の中で出た問題についても併せて確認していきたいと思えます。

ただ、日程が相手の学校との関係もありますので、平常日にならざるを得ませんので、その点についてはご理解をいただきたいと思えます。

なるべく皆さんで行けるように希望しておりますので、よろしくお願ひしたいと思えます。

それでは以上をもちまして第8回の高校对策員会を終了いたします。

大変ご苦労までした。

7 閉会

配布資料等一覧

- 資料1 夕張市高等学校対策委員会委員名簿
- 資料2 平成27年度公立高等学校配置計画地域別検討協議会（第2回）教育長発言要旨
- 資料3 平成27年度第2回地域別検討協議会 P T A分科会説明資料
- 資料4 北海道の新しい高校づくり2015
- 資料5 テーマ「夕張高校の魅力づくり」
- 資料6 公立高等学校配置計画に関する説明資料
- 資料7 地域キャンパス校